第1回 絹谷幸二賞贈呈式行われる

具象絵画の有望新人発掘の期待になう

若手画家の創作活動を応援し、具象絵画の可能性を開くことを目的に、洋画家・絹谷幸二氏（日本芸術院会員、独立美術協会会員）が提案・資金提供し、毎日新聞社が主催（協賛・三井物産）して立ち上げられた「絹谷幸二賞」の第1回贈呈式が3月17日、東京・千代田区の学士会館で行われた。贈呈式と祝賀パーティーには美術関係者ら100余名が参加、受賞者2名と共に新たな新人賞の門出を祝った。

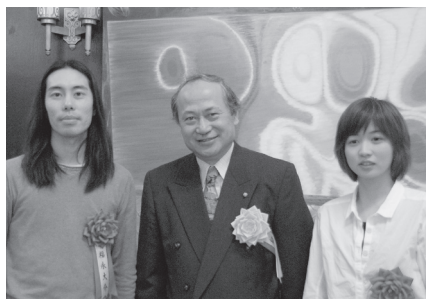
受賞は福永大介氏（27歳）と坂本夏子氏（25歳）

先に本紙3月1日号付で受賞結果を速報したが、記念すべき第1回08年度の絹谷幸二賞は画家の福永大介氏（27歳、神奈川県相模原市在住）、同奨励賞に坂本夏子氏（25歳、愛知県立芸術大学大学院生）が決まった。

同賞の対象は、08年12月末現在、35歳以下の画家で国籍は問わない。同年に国内で開かれた展覧会に出品された具象的傾向の絵画作品などとされた。毎日新聞社から依頼された全国の美術館学芸員、評論家、ジャーナリストから候補者27人が推薦された。選考委員である本江邦夫氏（多摩美術大学教授）、中井康之氏（国立国際美術館主任研究員）、福田美蘭氏（画家）の3氏によるポートフォリオ審査、作品視察、2度にわたる選考を経て最終的に2氏の受賞が決定した。福永氏は小山登美夫ギャラリー（東京都江東区）、坂本氏は白土舎（愛知県名古屋市）で開いた個展内容が評価された。

贈呈式で主催者として挨拶する朝比奈豊・毎日新聞社社長

まず、主催者を代表して朝比奈豊・毎日新聞社社長は「画壇の登竜門『安井賞』がなくなったのは惜しい、との声を聞いていました。絹谷先生から今回、若い画家を発掘し、その才能を伸ばそうではないか、との御提案を受けました。運営資金は出すけれど賞選考にも運営にも一切口を出さないとの潔い姿勢に我々は感銘を受け、学芸部・文化事業部など〝画壇の芥川賞にしよう〟と意気込みでこの賞の準備が始まった。御協力いただいた皆様に感謝いたします」と挨拶。同社長から福永さんと坂本さんに賞状を贈呈、それぞれに賞金100万円（絹谷賞）、50万円（同奨励賞）が贈られた。


絹谷氏を間に受賞した福永大介氏（絹谷幸二賞＝㊧）と坂本夏子氏（同奨励賞）

選考にあたった本江氏は「日本における具象的絵画をもう一度見直すべきだと思っていました。今回は第1回目なのできちっとした形でやろうと委員3人で相談し、〝新人賞〟の意味合いを吟味し、真面目に議論して選考した。受賞作は共に日本の鬱屈した社会の現実を反映して少し内向的なようです。絵画は社会の鏡となるだけで終わっては不十分、やはり未来に向けて何らかのメッセージ、絵を見ることで力が湧いてくる何かを発信して欲しい」と講評した。また「絹谷さんからは最後まで本当に電話1本来ませんでした」との話を披露した。

「絹谷賞」を受けた福永氏は「小さい頃から絵を描いてきました。当初は心の安定を得るためでしたが、最近は少し違ってきて表現するという意識が強くなってきたことです。自分が見たり感じたことを具体的、現実的に表せる絵画とは、すごく面白いなと思います。これからも自分が感じられる限り絵を描き続けていきたい」と受賞の喜びを語った。また、坂本氏は「昨年私の個展を開催し、この賞に推薦し、ふだん指導して下さった皆様に感謝しています。いつも描いてはいますが、絵画にしかできない表現を目指したい。正直言って賞を受けたことに驚き、また嬉しい気持ちです。絵を中心に生活し続けていく勇気に変えていきたいと思います」と挨拶した。

賞を発案した絹谷氏は「いま絵画を取り巻く状況は非常に厳しいものがあります。この状況を何とかしたいな、と常々思っていました。私も来年は藝大を定年で、何か社会に還元したいと思い、お世話になった毎日新聞社さんに御相談しまして、今日こうなりました。絵画とはその人の心を映す鏡と言います。受賞のお二人の作品、作家の心が良く映っています。御出席の皆さん、今後ふたりを見守り、育てて下さい」と祝辞を述べた。

会場には受賞した2人の関係者をはじめ美術館学芸員、評論家やジャーナリスト、百貨店・画廊関係者など大勢が出席した。それは具象絵画の有望新人発掘という期待を担う「絹谷賞」への関心の高さ、惹いては美術界全体の活性化への大きな期待でもあるだろう。